

外傷により変色した乳歯の長期観察例

○酒井亜希子、逢坂洋輔、立岡迪子、阿部亜美、
馬場篤子、尾崎正雄
福岡歯大 成育小児歯

【緒言】

小児の歯の外傷では受傷者の口腔機能や審美性、心理面へも大きな影響を与える。乳歯の外傷は1～2歳時に多く認められ、原因は転倒が最も多く、そのほとんどが日常生活の中で発生する。受傷歯が位置異常を伴わない症例でも数か月後に歯冠の変色を呈することがある。今回我々は、歯冠の変色が消退した外傷乳歯を経験したので報告する。

【症例Ⅰ】

患者 7歳10か月 男児

主訴 前歯の色（ピンク色）が気になる

処置および経過 2週間前に転倒し上顎前歯部を強打。上顎両側乳中切歯にM1程度の動揺を認めるもそのまま放置。左上Bに変色（ピンク色）を認めたが、歯根吸収などの所見はみられないため経過観察を行った。約半年後、変色は改善した。歯根に異常所見は認められない。

【症例Ⅱ】

患者 3歳1か月 女児

主訴 前歯が一本変色している

処置および経過 10日前に母親が前歯の変色（ピンク色）に気づき、改善されないで当科を受診。何度となく歯の打撲の既往はあるものの、詳細については不明である。初診から1か月後、変色は改善された。歯根に異常所見は認められない。

【症例Ⅲ】

患者 3歳2か月 女児

主訴 前歯を打った

処置および経過 2時間前に転倒し上顎前歯部を強打。上顎右側乳中切歯にM1程度の動揺、歯頸部歯肉からの出血を認めたため2週間の暫間固定を行った。初診から2か月後に変色（灰褐色）を認めたが、初診から8か月後には改善傾向（黄色）を認めた。

【考察およびまとめ】

外傷による乳歯の変色はピンク色、黄色、灰褐色、暗赤色などを呈する。外傷2～3週間後の変色は、歯の失活を意味するものではなく、変色は数か月後には改善されるという報告や、黄色に変色した歯はすべて正常な歯根吸収が起こり、灰色は歯髄壊死を意味し、1か月以内に根尖病巣を認めるといふ報告もある。従って、変色の消退傾向の有無を確認しながら処置方針を決定し永久歯交換まで観察を行う必要があると思われた。

含歯性嚢胞を疑わせた第一大臼歯の発育異常の一症例

○馬場篤子、阿部亜美、鶴田勝久、豊原達也、尾崎正雄
福岡歯大 成育小児歯

【緒言】

埋伏や萌出遅延の原因の一つに含歯性嚢胞があげられるが下顎第一大臼歯での発現は極めて稀とされている。今回演者は、下顎両側第一大臼歯に自他覚的症候は認めず、エックス線所見において偶然、歯冠を含む境界明瞭な類円型の単房性の含歯性嚢胞様透過像を認めたため、開窓療法を行い永久歯列交換まで経過観察を行ったので報告する。

【症例】

患児：1歳4か月 男児 主訴：検診 家族歴：特記事項なし

現病歴：定期検診時、パノラマエックス線写真において偶然下顎両側第一大臼歯歯冠を含む透過像を認めた。

全身所見：特記事項なし

口腔内所見：EDCBA | ABCDE

EDCB1 | 1 BCDE

下顎両側第一大臼歯部歯肉には腫脹、発赤、圧痛などの自他覚症候は認められなかった。

エックス線写真所見：パノラマエックス線写真において下顎両側第一大臼歯は根未完成で、歯冠上方を含むエックス線透過像が認められ、下顎両側第二乳臼歯の遠心根の吸収を認めた。CBCTにおいて、頬舌的に顎骨の膨隆は認められなかった。

臨床診断：下顎両側第一大臼歯部含歯性嚢胞の疑い
処置および経過

局所麻酔下にて下顎両側第一大臼歯の咬合面を覆っていた組織を一塊で除去し開窓療法を行った。

病理組織学的所見：主としてfibrous tissueより成り立ち、表面の一部に高円柱状の歯原性上皮(内エナメル上皮に類似)がみられ、fibrous tissue中にも歯原性上皮の小塊や歯原性由来の組織が一部みられる。

病理診断：Developmental anomaly of the lower first molar

処置後約6年、永久歯列へと交換し経過良好である。

【考察】

含歯性嚢胞の発生由来は、歯冠形成後のエナメル器の嚢胞化によるもので嚢胞腔内に歯冠を含むのが特徴である。嚢胞が大きくなるにつれて顎骨を膨隆させ波動を触れる。嚢胞に隣接する歯は圧迫され位置異常や歯根吸収をきたすことから、本症例をこのまま放置していたら含歯性嚢胞へと変化した可能性も否定できないと思われた為積極的に開窓を行った。